

## ● 30代の中頃

一九二五（大正14）年、上京した秀子は富本一枝の紹介で知りあった丸岡重堯と結婚する。「勉強は一生するもの」との夫の信条のなかで共に学び、居ながらに経済・社会・婦人問題などを身につけていった。その後長女明子の誕生と順風満帆の日々を送っていたが、出張先で感染した腸チフスで夫が急逝し、生活は一変する。

暮らしを支えるために下宿人を置き、家庭教師などもしながら産業組合中央会調査部に勤務、消費者運動や農村婦人の実態調査などに参加する。時には子連れで全国町村を歩いての行動は、理論ではない実践に基づいたものとして「日本農村婦人問題」の著書に結実させた。一九三〇（昭和5）年である。

このうち奥おめお、平林たい子らと知り合い朝日新聞社月曜クラブのメンバーとなり、また平塚らいてう、田村俊子らと読売新聞婦人欄コラムのレギュラーとなり、日本農業新聞、信濃毎日新聞などにも執筆した。その力量を存分に発揮し、ふつうに生きる女たちに、新聞の投稿欄をはじめ、いろいろの場での思いを人生の証として書くことを教え育てていった。

どんな時も、どんな人にも対等に物を言いきちんとした言葉でむきあっていく生き方が、同僚であった石井東一の心を動かし、一九三七（昭和12）年東一と再

婚、北京に渡る。長男龍一も誕生するなかで、石井は執筆し行動する秀子のよき理解者として、最後まで応援しつづけた。



新日本婦人の会代表委員たちと  
左から丸岡秀子、平塚らいてう、勝目テル、  
櫛田ふき、小笠原貞子 1967（昭和42）年  
『ひとすじの道を生きる』（ドメス出版）より

## ● 「ひとすじの道」を執筆

著作活動はいよいよ進み、六八歳のとき自伝的小説「ひとすじの道」全三部作を執筆。生いたちから結婚に至るまでの心の内面を、恵子という主人公に託して悲しみ、辛さ、さびしさをのりこえていく姿をわかりやすい言葉で表現。読書感想文課題図書となって次代の子どもたちの心を打った。

二〇〇六（平成18）年には「丸岡秀子・ひとすじの道」として映画化され、更に広く世に知られていく。数ある講演では、第二十回母親大会での席上「母親がかわれば社会がかわる」と訴え、満場の女性たちの感動と共感呼び多くの婦人実践者を育てていった。



母親大会での記念講演  
1972（昭和47）年  
日本母親大会連絡会提供

一九八六（昭和61）年最愛の娘明子を失う。その切なさを余すことなく「声は無けれど」に綴りながらも勁く生きて行く。

決して体制におもねらず、命を守ること、平和を願うことや人権尊重の姿勢を貫いて一九九〇（平成2）年その生涯を閉じた。

碑文にしるされた思いを多くの人とのお会いの中で実践した秀子の生涯は、現在を生きる女性たち一人ひとりの心の中に、「光」となって輝いている。

（佐々木都）

### 参考文献

丸岡秀子追悼文集編集委員会『いのちと命を結ぶ』

信濃毎日新聞社

丸岡秀子『ひとすじの道』3部作 偕成社

『ひとすじの道を生きる』写真集 ドメス出版

『読むこと・書くこと・行うこと』碑建立記念誌 ほか

### 肖像写真

『ひとすじの道を生きる』（ドメス出版）より

## 佐久の先人たち<sup>14</sup>

### 農村女性の解放に 生涯をささげた

まる おか ひで こ  
**丸岡 秀子**

(1903~1990年)



土に根を張って生きる女たちに、秀子は自分の思いをやさしく、時にきびしく教えてくれ、それは母親のような存在だった。

評論や多くの執筆を通して、心から平和を願い命の大切さを説いた。

で酒造業を営む父井出今朝平、母ツギの長女として生まれた。だが、生後十か月で母と死別、以後幼少期を中込村（現佐久市中込）の農家であった母方の祖父小林億二郎、祖母喜井のもとで過ごすことになる。

小林家は代々名主の家柄であったが、江戸時代の水争いの折、曾祖父が村人を救うために幕府と対抗したことから財産を没収され、貧しい暮らしを余儀なくされていた。どんなことがあっても断乎として正義を貫く曾祖父の反骨精神は、そのまま秀子にも受け継がれていく。

#### ●生きる原点に「農」

一方、朝早くから夜遅くまで一日中ただ忙しく働かざるの祖母喜井の姿や、また大家族の商家に嫁ぎ二十四歳の若さで逝った母ツギのことなどから「農村女性の解放なくして真の解放なし」という女性の生き方を心に刻み、これは生涯を通じての叫びとして形づくられていった。

一九一〇（明治43）年、太鼓楼造りでギヤマン学校ともいわれた南佐久郡中込尋常高等小学校に入学した秀子は、「小さい日本だけを見ているのではなく、その先の海の向こうの外国のことを見よ」という建学の精神を心の奥深く刻み、広い視野に生きる基礎を学びとる。後に「私の学歴のなかでは、小学校が一番自分の心に太い根を張っている」と言っている。学業成績

は平均点九六点というすばらしさで、長野高等女学校（現長野西高校）へ進学。そこでの寄宿舎生活では、学業以外にある新しい出会いが夢を大きくふくらませた。常に優れた成績をおさめる秀子は、一九二〇（大正9）年知事の推薦によって奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学）文科に入るが、教育方針の一部に納得のいかない思いを抱いた。



奈良女子高入学当時 前列右端が丸岡  
『ひとすじの道を生きる』（ドメス出版）より

そんな折、堂々と平和・命・自由人権思想などを実践している富本憲吉・一枝夫妻を知って積極的に富本家を訪ね、夫妻の相互敬愛の生き方に目覚めていった。卒業後、三重県亀山女子師範学校に教師として赴任するが、担任する一生徒の退学処分を抗し、生徒をかばって自ら退職した。身を挺して生徒を守り抜いた工ピソードとなっている。

北に浅間山、南に八ヶ岳・蓼科山を、そして浅間山に向かつて真直ぐ流れる千曲川、こうして佐久の大自然の中、生家も望める臼田稲荷山公園（現佐久市）に、一九九六（平成8）年丸岡秀子の碑が建てられた。「浅間山は私の恋人」と言いきる秀子の感性は、この豊かな故郷の自然の中で育まれた。

碑文の『読むこと 書くこと 行うこと』は、百冊をこす著書のなかのどこにも見当たらない言葉だが、これこそまさに秀子の生き方そのものであるといえる。秀子は一九〇三（明治36）年臼田町（現佐久市臼田